

## 人生の

## 道しるべ

あなたの悩みに答えます

森本あんり

(東京女子大学学長)

一九五六年 神奈川県生まれ、プリンストン神学大学院博士課程修了(P.H.D.)。国際基督教大学教授などを経て二〇二二年四月より現職。著書に「反知性主義」不寛容論(いずれも新潮選書)など。



写真 遠藤 宏

ますが、妻からは厄介者扱いされているような気がします。「いままでこんなに頑張って働いてきたのに」とは思いながらも、なるべく不満は漏らさないようにしています。二人の子どもは共に家を出て、自立しています。

私の趣味は読書くらいです。昔はゴルフもやりましたが、いまはそこまでの体力がありません。何か新たな趣味を見つけれればとも思いますが、生活には困っておらず、いまのところ大きな病気もなく、二人の子どもを送り出せただけでも幸せなのかもしれません。何か新たな趣味や目標を見つける術はないものか、教えてください。

(東京都、六十代、男性)

相談  
人生の新たな目標を見つけたい

昨年に定年してから、人生の目標を失ってしまいました。私は大学卒業後から定年までずっと同じ銀行に勤めてきました。家族のためには思

って働いてきました。

でもいま振り返れば、平日の帰りは遅く、土日に仕事が入るのは当たり前。とても家族サービスが十分だったとは言えません。

いまは年金生活で基本的に家に

## 回答

Answer

早いもので、この人生相談も今号で最終回を迎えます。いただいたご相談は、年代や性別も、置かれた立場や境遇もさまざまでした。

本誌の読者層が思いがけず広いことを知りましたが、その読者のなかに「この欄に相談ごとをぶつけてみよう」と思われた方がこんなにおられた、ということに何よりも驚いています。

おそらく、相談者は私のプロフィールなどを見てそう思われたのでしよう。この一年のあいだに私の職場や役割は変わりましたが、変わらず信頼を寄せてご投稿いただいた方々に、篤く感謝を申し上げます。

最終回に取り上げるのは、じつは少し前にいただいていた相談です。

似たような質問を第四回「人生の有限性にどう向き合う？」で取り上げたので、お答えを先延ばしにしておりましたが、その回の相談者は三十代でした。

今回は、私自身と同年代の方からの問いかけですので、最後にお答えしておきたい、と思ったのです。もしかししたら、もうご自分なりの答えを見つけて解決済みの話になっているかもしれません。その場合にはご容赦願います。

まず、相談者の境遇を推測してみます。このご時世に競争の激しい金融業界で、定年までずっと同じ銀行に勤めてこられた、ということは、

世間的には相当な成功者だろうと思います。そうでなければ、早い段階で系列や取引先へ転身しておられるはずだからです。

上には上があるでしょうが、とりあえず肩書やお立場には申し分がない。「生活には困っていない」とお書きのとおり、年金生活といっても十分にゆとりのある暮らし向きでしょう。

ご家庭でも決して不幸というわけではなさそうです。妻からは厄介者扱い「されているような気がする」とありますが、その程度なら、この年代の夫としては文句を言えた義理ではありません。

ご本人は「いままでこんなに頑張っ



れますが、率直に申し上げて、その頭張りは家族のためではなく、自身のためだっと思えます。いまの時代がどうかは知りませんが、私と同年代なら、家族のことなど気にかけていたら仕事で成功することなどできなかつたはずですよ。

でも、それで「家族のために働いてきた」などと言ってははいけません。そのおかげで二人の子どもを無事に育て上げることができた、にしてもです。だいたい、「家族サービス」が不十分だった、などと言った時点で、もうあなたは失格です。

そして、傍にいたる妻は、そういうあなたの本心を知り抜いています。長年連れ添った妻を言葉でごまかすことはできません。

### 誰かを喜ばせることを考える

それでも、ご家庭のことはまあいいとしましょう。問題は、仕事一筋に生きてきたので、定年で人生の目標をなくしてしまっただ、ということですよ。

相談者は、「何か新しい趣味でも見つけられたら」と願っています。が、これも率直に申し上げます。そんなものは見つけられないと思います。ゴルフも読書も、さして熱中できない。これからほかにどんなことをやっても、たぶん同じで、すぐに飽きてしまおうと思います。

ここは第四回の相談に書いたことと重なりますが、私も同じ世代に属しているの、よくわかります。わ

れわれは、ともかく仕事一筋で、余暇なんてものは存在しませんでした。やりたいことがあっても、ずっとそれをお預けにしてきた。

あまりに長いこと我慢し続けてきたので、いざ時間やお金が自由に使えるようになって、その意欲がもう失せてしまっているのです。

そこで私は、自分がどういうときに満足感を覚えるのかを振り返ります。自分が苦勞してやってきたことが、何とか無駄にならずに実を結んだとき。

でも、実を結ぶって、いったい何のことだろう。出世のことか。金銭的な報酬のことか。そのどちらも手にしたあなたは、ご存じでしょう。そうではなくて、嬉しいのは、それ

を誰かに喜んでもらえたときのことなのです。

安手の幸福論を売りつけるつもりはありません。でも、人間って不思議なもので、自分が幸福になるためには、自分だけでは足りないのです。どんなに斜に構えたシニカルな人間でも、心の底では、誰かとつながっていたい、と思っています。

自分が誰かの役に立っている、自分のしたことで誰かが一緒に喜んでくれている、そう感じられるとき、

私たちは報われた思いがします。

人間の自己表現には、他者との交わりが必要だ、ということですよ。人は、他者の生のなかに、自分が意味をもつことを願います。自分の存在が、誰かの人生にポジティブな意味をもつことを願っているのです。やっぱりアリストテレスは正しい。人間は「社会的動物」ですよ。

幸いあなたは、健康にも恵まれ、生活にもゆとりがあります。もしあなたが人生の目標を探しておられる

なら、これからは自分が楽しむことではなく、誰かを喜ばせることを考えてください。

何も大上段に構えた社会貢献ばかりではありません。身の回りでも身近所でもいい。

誰かと一緒に喜べるのがあれば、あなたは「天に宝を積む」ことになり、魂の充足を得ることができると思えます。

読者の皆さま、一年間のお付き合いをありがとうございます。

PHPの本

# 世界と日本を 目覚めさせた ウクライナの「覚悟」

前ウクライナ大使による初の単著

倉井高志 著

直近までウクライナ大使(～2021年)を務め、ロシアとウクライナを熟知した元外交官が、両国の情勢と展望について解説する。



世界と日本を  
目覚めさせた  
ウクライナの「覚悟」

倉井高志  
Takashi Kurai

定価1,760円(10%税込)

PHP研究所  
<https://www.php.co.jp/>